



特 集 歴研と私

歴史研究所は昨年12月に設立15周年を迎え、歴研ニュースは今号で100号となりました。これを記念して、「歴研と私」というコーナーを企画しました。これまで歴研に携わってこられた方々に、思い出やこれからの希望などについて記していただきました。次号以降も順次掲載します。



研究所開設の思い出

多和田 雅保

私は2003年の4月から2008年の3月まで、歴史研究所で研究員として働いていました。正確にいうと歴史研究所の設立は2003年12月であり、最初の8か月は地域史研究事業準備室の研究員でした。勤務部屋は、今はなき上郷庁舎(旧上郷町役場)の3階で、もともと上郷町議会の議場を半分に使った大きな部屋に、机と椅子が並べられ、スタッフは全員そこに詰めていました。初年度の研究員は自分1人だけ、あとは常勤の調査研究員2名、調査研究補助員2名、事務職員2名、参与1名が毎日顔を合わせる面々でした。

最初の仕事は、大枠を与えられていた研究所の制度設計を肉付けしていくことでした。何層にもわたる会議の位相の整理、さまざまなタイプの研究の類型化、同じ建物の2階に設置されることが決まっていた研究所の空間設計など、基本的な事柄を詰めるために、何度も話し合いを行いました。研究者としての立場の自分ももっとも心を砕いたのは、それまでに公表されていた地域史研究事業に関する「答申書」に示された理念を、どのようにして研究所の仕事として実体化し、具体的な形を与えていくかということでした。辛いこともありましたが、新たに地域史研究の拠点を創造していく過程に自分が関わることの幸せを、日々噛みしめていたのだと思います。夏前から2階の工事が始まった時は非常にワクワクしたのを、今でもきわめて鮮明に覚えています。非常に忙しい毎日のなか、それでも史料調査、基礎研究、ゼミナール、研究集会、出版を同時に進めていたわけで、なぜそんなことができたのかが不思議でなりません。

誰にとっても研究所を作るのは初めてだったわけですから、最初は文字通り手探りで、そのおかげだと思いますが、私はかなり好きなことを自由にやらせてもらいました。学生上りの世間知らずで、ずいぶんとわがままを貫いたはずですが、今でも非常にありがたく思います。飯田を離れてからはずっと大学勤めをしていますが、飯田で培ったさまざまな考え方の「お釣り」で仕事をしているといっても、決して大げさではないのです。

(たわだ まさやす 横浜国立大学/歴史研究所顧問研究員)

歴史研究所で学んだこと

清水 迪夫

調査研究補助員として10年間の勤務の中で多くのことを学ばせていただきましたが、その中から「大平」について書きます。

思いもかけず『飯田・上飯田の歴史』の作製に参加させていただき、「大平部落」(1970年集団移住により解散)の歴史と関わり、そこから多くのことを学びました。近世文書を主に扱う上巻の「大平の開発と発展」の項目を執筆することになりましたが、「大平」についての知識は、飯田藩の商人が大平の開発を藩に申し出たことがその始まりであるということくらいでした。大横町の御用板商人であった山田屋新七が飯田藩へ開発を願い出た文書の原書(大平紙屋文書)を初めて手に取って広げた時の興奮はいまも忘れません。それが私の古文書入門のきっかけになり、近代史をフィールドとしてきた私にとっては近代史料の理解にも大きな影響を与えることとなりました。

「限界集落」ともいうべき伊那谷と木曾谷を結ぶ大平峠近くの平地にあった「大平部落」は、戦後の資本主義発達に伴う「高度経済成長」の大波のなかで消滅を余儀なくされました。第二次世界大戦後の米ソ冷戦において社会主義社会との競争に勝った資本主義社会が現在はやきづまり、未来社会の展望が見えないと言われていますが、大平の歴史を調べるなかで学んだ「里山資本主義」(藻谷浩介)、「ローカリストの時代」(内山節)、「ローカリズム宣言」(内田樹)を説く著書は、私の歴史観にとって大きな位置を占めるようになっていきます。

また、大平の調査研究の中でお世話になった大平宿「紙屋」の大蔵さんが、大平の歴史を残すべく当時の人々の聞き取り調査をされていることを知り、うれしく思っています。

歴史研究所への要望としては、その存在(アカデミア、ゼミナール、地域史講座など)をもっとPRしたり、大学や大学院などで研究している地元出身の研究者を講師に招いたりしてはどうかと思っています。

(しみず みちお 郷土史研究家/ 歴史研究所市民研究員)

連帯を求めて孤立を恐れず・・・

糸原 明

平成から令和への改元。マスメディアが先導する軽薄なお祭り騒ぎと思考停止状態。40年程前、元号の法制化に強い反対論があったことなど既に忘却の彼方。メディアや広告産業により作り出される記号化された言葉、そのイメージのみが投影された共同の幻想の中にわたしたちはいます。

いかなる政治権力も持たず、基本的人権である言論の自由も一定の制約を受ける平成天皇・皇后は、行動によりその思いを国民に伝えました。ハンセン病療養所、水俣、沖縄、太平洋の島々の訪問など弱者や少数者の傍らに身を置き、示されたあたたかで強い眼差し。一方で、このような形で表明された対話の回路にわたしたちは真に向き合っているのでしょうか。

自宅内の整理をしていたところ、セピア色になった小冊子を見つけ出しました。戦後間もなく、政府が国民に配布したと思われる「わたくしたちの憲法」と題されたこの冊子には、新しい文化国家の建設と基本的人権の尊重がうたわれています。この時冊子の「宮沢俊義」の文字に目が留まりました。宮沢は戦後憲法学の泰斗で、その学説は通説的見解とされました。初学者だった頃のわたしが今でも記憶に残っているのは、彼が憲法概説書のなかで「人権宣言の担保」をするものとして「抵抗権(革命権)」(人権を侵害する公権力に対する非合法的な抵抗の権利)を論じたことです。異例な紙幅を使い、法哲学の根本問題で随一の難問と言及していました。わたしにとっては大いにショックだったことが記憶に残ります。

日本国憲法には、基本的人権はわたしたちの祖先の貴重な努力により戦いとられたもので、不断の努力によりこれを保持しなければならないと規定されています。権力と自由との間には不断の緊張関係があり、立憲主義的憲法秩序を維持するために何をしなければならないか、憲法内在的に自覚する必要があると痛感します。一人ひとりが、社会が、前へ進むために。

(くめはら あきら 元歴史研究所副所長)

私事ではありますが

宮下 金善

15年も過ぎたのですね。私にとっては、五十代に入った頃から六十代半ばまでということになります。子どもたちが順に独立していき、親の介護と送り、自分の退職と老後の生活の始まり等々、話には聞いていたけれどこういうことなのかと、体験してみても分かることばかりでした。生家のある阿南町和合での山村暮らしはまだ現在進行中で、人生の楽園ははるかかなたです。

たまたま家の古文書調査が始まったのがきっかけになって、設立当初からの歴史研究所近世史ゼミに通うようになりました。そのころは老後の趣味のひとつになればくらいの感覚でした。ずっと真面目な生徒だった訳ではありませんが、ゼミ通いと研究会参加は生活の楽しいアクセントになりました。

ゼミが縁となって、歴史研究所で史料調査のお手伝いをしたことも、とてもいい経験になりました。8年ほど前には夫婦共著の『書き残された和合史』、今年三月には「和合の歴史と文化を伝える会」から『いま 書き残す和合の人々』を出版しました。本格的な研究ではありませんが、地域の歴史・風俗を形に残しておきたい、思い切ってやってみた仕事です。和合小学校で子どもたちに古文書の話をするという、冷や汗ものの経験もしました。地域の歴史を学ぶことや古文書解読は、今となっては人生で大きな意味を持つようになりました。もし歴史研究所がなかったら、目的のない生活がだらだらと続いていただけかもしれません。

歴史研究所がずっと地道な活動を続けてきて、その成果を多くの出版物や研究会の開催等で広く紹介していることに感謝しています。その存在意義や活動内容がもっと評価されていのように思います。また、地域史の研究会や古文書の勉強会に顔を出してみると、仕事引退後と思われる人を中心に熱心な参加者が大勢いることに驚きます。今後、そうした人たちの力をうまく使っていくこともあり得るかなと思います。

(みやした かねよし 郷土史研究家/歴史研究所近世史ゼミ)

歴史研究所の指導を糧にして

小島 稔

私たち座光寺では、歴史研究所発足時から、その指導を得て、史学会を中心に古文書研究、麻績史料館所蔵資料調査・整理等の活動を行ってきました。

その後、自治組織発足に伴い、新たな地域づくりの目標に向けて、地域の特性である豊かな自然、歴史・文化を大切な財産とし、地域への誇りと愛着を深め、それらを保全継承し地域づくりに生かすべく、自治委員会・公民館、そして史学会等諸機関が連携し、地域自治会の特別委員会「歴史に学び地域をたずねる会」を発足させました。その活動内容も、麻績史料館資料の調査、整備・保存活動の継続のみならず、地域の自然、歴史・文化の調査研究、学び合い、そして、新たな地域資源の掘り起こしと環境整備、その利活用等へと範囲を広げてきました。それ等の新しい取り組みにも、折に触れ指導いただきました。

月2回の史料館所蔵資料の調査・整理に加えて、月1回の「記憶と経験を語る集い」として古老からの聞き取りも始めました。これらには研究所の先生も参加下さり、指導いただいています。資料整理はようやく一区切り、また、「記憶と経験を語る集い」は会を重ねること50余回、今はその記録集出版に向けての作業に力を入れるまでになりました。我々素人集団にとって先生方の指導はかけがえのない学びの機会です。

また、恒川官衙遺跡の史跡指定を前にした飯田アカデミア第66講座の地元での開催、地域の子供たちに遺跡学習の研究報告の機会を与えてくださったこと、研究所の先生方の当地域に関する研究・調査報告等、地域住民の地域への関心を呼び覚ます大変有意義な企画でした。これらは、今後も大切にしていきたいと願っています。更に、私たちの活動の発展としての「2000年浪漫の郷」づくり、リニア開通を見据えた地域を挙げての新しい取り組みを進めるなかで、情報発信・人材育成・普及啓発等の事業を文化庁補助事業に歴史研究所の協力を得て申請し、採択されました。明日を見つめての事業、活動への意欲を高めています。

地域を見つめ、その活動を見つめ、その将来を考え、直接・間接に指導を継続くださっていること、我々は勿論地域の励みでもあります。このような取り組みがより多くの地域で展開されたと、その御苦勞を思いつつも願うものです。

(こじま みのる 歴史研究所協議会委員/座光寺・歴史に学び地域をたずねる会)

1. 共同研究

基礎調査	A	史料所在状況調査	羽田 真也
	B	史料現状記録調査	羽田 真也
	C	オーラルヒストリー調査	田中 雅孝
	D	歴史的建造物調査	福村 任生
	E	歴史的公文書調査	太田 仙一
	F	在外史料調査	吉田 伸之

単地域研究	A	飯田・上飯田	多和田 雅保
	B	座光寺	羽田 真也
	C	鼎	太田 仙一
	D	川路	羽田 真也
	E	清内路	福村 任生

課題研究	A	小学校区を単位とする地域社会の文化構築に関する歴史的研究	多和田 真理子
	B	山里の分節的把握—阿智村清内路を素材として	吉田 伸之
	C	近世山里社会の存立条件に関する研究	吉田 ゆり子

2. 基礎研究

顧問研究員	吉田 伸之	「小規模伝統都市・飯田の社会＝空間構造」3
	大串 潤児	「村と戦争」に関する総合的研究
	加藤 陽子	森本州平日記を読む
	田嶋 一	飯田・下伊那の教育・人間形成についての教育社会史的研究
	多和田 雅保	近世・近代の飯田町を中心とするネットワークの研究
	吉田 ゆり子	下伊那地域における身分的周縁に関する研究 近世城郭の歴史的研究
研究員	羽田 真也	近世信州伊那地域における村社会の構造—座光寺村を素材として— 近世の天竜川河原をめぐる社会秩序—下川路・時又・今田を対象として—
	太田 仙一	近現代長野県下伊那地域を対象とする経済・経営史的分析—天龍社資料を中心に—
	福村 任生	旧公図等を用いた飯田町の空間構造に関する研究
	原 英章	満蒙開拓青少年義勇軍の送出についての史的研究—学校教育や役場等現場の関わりを中心に— 飯田市平和祈念館資料室 所蔵資料の歴史的調査 戦争末期における飯田下伊那の動き—川路への豊川海軍工廠の疎開、農兵隊等—
田中 雅孝	養蚕地帯の都市と農村	

調査研究員	齊藤 俊江	下伊那地域における満州移民の研究 飯田遊郭の歴史
	竹ノ内 雅人	飯田・下伊那地域の寺社と地域社会に関する基礎的研究
	多和田 真理子	小学校の設置運営と地域の関わり—日誌類の分析を中心に—
	千葉 拓真	近世の飯田・下伊那における領主間ネットワークと地域社会の総合的研究
	樋口 貴彦	山村の木材利用の手法に関する研究
	前澤 健	城詰米設置と脇坂飯田藩の検地・樽木米
	本島 和人	下伊那郡町村長会による満洲農業移住地視察の再検討 青少年義勇軍送出と郡市教育会の対応の比較検討
	安岡 健一	飯田下伊那における社会教育の歴史的研究 3
市民研究員	粟谷 真寿美	農業青年、楯操の歩み—自由大学から、江渡狄嶺、ヤマギシズムへ—
	上河内 陽子	旧川路村の青年学校教師・今村正業氏宛軍事郵便の研究
	清水 迪夫	歌誌『夕樺』と下伊那の青年たち
	林 武史	飯田の街角の文学デザインと歴史を見つめる川

第17回飯田市地域史研究集会を開催します

9月7日(土)・8日(日) 開催

会場 飯田市役所 C棟3階会議室

日時 7日(土) 10:00～17:00
8日(日) 9:30～12:30

講演・報告

石井 寛治さん(東京大学名誉教授)
田中 雅孝(歴史研究所調査研究員)
片桐 一樹さん(伊那谷自然友の会)
大石 真紀子さん(阿智村役場協働活動推進課)
太田 仙一(歴史研究所研究員)ほか

飯田・下伊那の蚕糸業と地域社会

今年度の地域史研究集会は、近現代の飯田・下伊那を経済的に支えた蚕糸業をテーマにします。蚕糸業は、養蚕や製糸など蚕をめぐる産業を総称したもので、近現代の飯田・下伊那、そして日本社会全体を理解するうえで極めて重要なものでした。第1日目は、日本の蚕糸業史研究をけん引してきた石井寛治さんが講演を行います。あわせて、この地域の蚕糸業についての講演や研究報告を実施します。第2日目は、飯田・下伊那の蚕糸に関する文化や遺産をどう未来へ継承していくのかを考えます。あわせて、地域史の個別研究報告も実施します。

建築史ゼミでは、飯田・下伊那の建築・町並み・風景を大切な地域遺産として考えてゆきます。今回ゼミを再開するにあたっては、2008年度以来のゼミの研究成果(本棟造り民家や地域の歴史的景観など)を振り返りつつ、飯田・下伊那の地域建築史として現在どのような課題があるか皆さんと考えます。

ゼミの進行は、前半で建築史に関する勉強会を行い、後半で参加者自身の関心に基づく自主課題に取り組んでいただく予定です。また、隔月程度で勉強会とは別に見学会を実施し、フィールド学習にも取り組みます。なお、ゼミの活動成果については、建築史ゼミのウェブサイトを開設し、インターネットを通してリアルタイムで発信することを目指します。情報化社会のなかで、変わりゆく町並みや地域の風景をいかに記録し公開できるか、その方法や手段についても参加者のみなさんと議論を深めていきたいと考えます。

〔参考図書：飯田市歴史研究所編『本棟造と養蚕建築』2011年、同『農村舞台』2012年、同『飯田・下伊那の歴史と景観』2019年〕

担当者：福村任生（歴史研究所研究員）

開催日時：毎月第3金曜日（適宜変更あり）18:30-20:30

会場：歴史研究所研修室

初回：7月19日（ガイダンス）

事前に電話・メール等でお申込みください。（当日の飛び込み参加も可能）

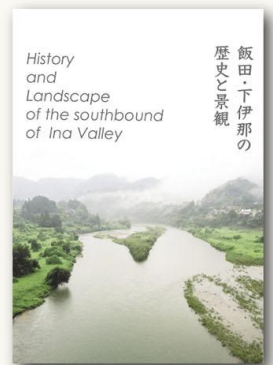


『飯田・下伊那の歴史と景観』

飯田市教育委員会発行／飯田市歴史研究所編集

A5判 オールカラー 206頁 定価 2,000円（税別）

本書では、飯田市及び下伊那郡を対象とした伊那谷南部の「歴史と景観」について考えます。巻頭には、近年、国際的に関心が高まっている「文化的景観」を解説する2本のエッセイを収録し、本論では「台地とまち」、「街道と宿場」、「河川と水運」、「山林と山里」の4つのテーマから、全部で17の地区や場所を取り上げます。わたしたちの身近な景観は、近年も変化し続けていますが、本書はそれらを歴史的な視点から見つめ直す試みといえます。



第1章 台地とまち

1. 飯田 ー城下町の現在と過去ー
2. 松尾 八幡 ー八幡宮と門前ー
3. 鼎 下茶屋 ー茶屋と職人の町ー
4. 上郷 ー野底山と段丘の町ー
5. 座光寺 ー段丘から川原にひろがる村ー

第3章 河川と水運

10. 下久堅 南原 ー橋と往来ー
11. 川路・天龍峡 ー治水と観光ー
12. 御供・温田 ー山峡の港町ー
13. 平岡 ー番所とダムのある町ー

第2章 街道と宿場

6. 和田・上町 ー秋葉街道と宿場ー
7. 駒場 ー中馬街道と宿場ー
8. 新野 ー千石平と祭りー
9. 大平 ー大平街道の盛衰と宿場ー

第4章 山林と山里

14. 立石 ー千柿の里ー
15. 吉岡 ー下條氏の築いた城と町ー
16. 下栗 ー日本のチロルー
17. 清内路 ー榎木と出作りの里ー



下栗の景観

『伊那谷の暮らしと住まい』

飯田市歴史研究所発行

／飯田市歴史研究所 わが町の建築ゼミナール編集

A5判 オールカラー 54頁 定価 1,000円（税別）

歴史的に受け継がれてきた場所や建物を活用していくことは現代社会の課題の一つとなっています。『伊那谷の暮らしと住まい』は、この地域に息づいてきた住宅の成り立ちと、地域の暮らしの結びつきをふりかえり、工夫しながら現代に引き継がれる家々の姿、空き家の活用事例や古くからある街並みや山里における住まいの設計事例を取り上げて、この地域の住まい方の魅力を提示する冊子です。

飯田アカデミア2019第87講座

戦前日本の農村社会をどうみるか

—長野県に視座を据えて—



座光寺史学会『レンズがつづるふるさとの歴史—座光寺の百年』1988年

6月29日 土

第1講 13:30~15:00

地主制の再評価をめぐって

第2講 15:20~16:50

産業組合の政治経済的機能

6月30日 日

第3講 10:00~11:30

大恐慌下の救農政策と森林資源

第4講 13:00~14:30

農山漁村経済更生特別助成事業
と「満州」移民

講師 小島 庸平さん (東京大学)

会場 飯田市役所 C棟3階会議室 (飯田市大久保町2534)

資料代 500円(2日間共通)※高校生以下無料

※1日のみ、1講義のみでもご参加いただけます。受講をご希望の方は歴史研究所までお申し込みください。当日参加も可能です。

一時、沈滞を見せた日本農業史研究は、近年、再び活況を取り戻しつつあります。その一つの中核となったのが飯田・下伊那地域であり、長野県でした。本講座では、地主制・産業組合・経済更生運動・満洲移民といった、かつて農業史研究で盛んに議論されてきたトピックを取り上げ、近年の研究動向と新たな知見を長野県に視座を据えて紹介します。

地域史講座

「豊川海軍工廠の天龍峡分工場
— 戦争末期の工場疎開と川路村 —」

開催日: **6月15日** 土

時間: 14:00~16:00

報告者: 原 英章 (歴史研究所調査研究員)

会場: 川路公民館

※参加費や事前のお申し込みは必要ありません。お気軽にお越しください。



豊川海軍工廠の天龍峡分工場

戦争末期に川路へ疎開してきた豊川海軍工廠の天龍峡分工場や地下工場の設営工事等について旧川路村役場史料から見えてきた事を報告します。

定例研究会

書評会: 石井寛治著

『資本主義日本の地域構造』

(地域史研究集会プレ企画)

開催日: **7月6日** 土

時間: 14:00~16:00

報告者: 太田 仙一

(歴史研究所研究員)

会場: 歴史研究所 研修室

歴研ゼミ&ワークショップ

6月・7月の予定



受講生募集!

スタッフとともに歴史を学んでみませんか。

会場: 歴史研究所 研修室

近現代史ゼミ

担当: 田中雅孝 (調査研究員)

6月8日・22日 / 7月13日・27日

(第2・第4土曜日) 10:00~11:40

地域史ゼミ

担当: 太田仙一 (研究員)

6月14日・28日 / 7月12日・26日

(第2・第4金曜日) 18:30~20:30

近世史ゼミ

担当: 羽田真也 (研究員)

6月26日 / 7月24日

(第4水曜日) 18:30~20:30

建築史ゼミ

担当: 福村任生 (研究員)

7月19日 (初回)

(第3金曜日) 18:30~20:30

思想史ワークショップ

市民の皆さんが自主的に学び合う場

6月5日・19日 / 7月3日・17日

(第1・第3水曜日) 19:00~20:40

自分史ワークショップ

市民の皆さんが自主的に学び合う場

6月22日

(第4土曜日) 13:20~15:00

ゼミ・ワークショップの詳細・お申し込みについては、歴史研究所までお問い合わせください。TEL: 0265-53-4670

開所時間: 午前9時~午後5時 休所日: 日曜日・月曜日・祝日・12月29日~1月3日